

楽漢的「勸学院の雀」考

『和製』故事成語の観点に照らして――

狭山ヶ丘高等学校 樋口 敦士

一 はじめに

一般的に「故事成語」といえば、中国由来のものとはかり思われがちであるが、必ずしもそうであるとも限らない。本稿で取りあげる「勸学院の雀は蒙求を轉る」は、現在ではあまり耳にすることが少なくなったが、これはわが国で誕生した故事成語である。平安貴族の大学別曹に由来する「勸学院」と中国古典『蒙求』を「雀」が取り持った和漢融合による異色の成語である。現代では「門前の小僧習わぬ経を読む」（類語に「智者の辺の童は習わぬ経を読む」、「鄭家の奴は詩をうたう」）が一般的に使用され、「勸学院」も『蒙求』も耳遠いものになってしまった感がある。ただ、当該成語は人々の教養として記憶されてきた経緯を有している。大正二年（一九一三）十月二日号の『時事新報』に夏目漱石は「漱石といふ故事は蒙求にあります」と明らかにしており、自身の雅号の典拠が『蒙求』にあることに言及している。本稿では「勸学院の雀は蒙求を轉る」を取りあげて諸書の用例を確認する。

二 「勸学院」と『蒙求』について

故事成語「勸学院の雀は蒙求を轉る」は現在一般に使用される状況は見られない。大学別曹「勸学院」も古典籍『蒙求』も耳遠くなったことがその一因であろう。「勸学院」は弘仁十二年（八二二）に藤原冬嗣が創設した寄宿舎（後に大学別曹）が有名である。当時は和氣氏の「弘文院」や橘氏の「学館院」、在原氏・賜姓源氏等の「塙学院」などがあつた。また、「勸学院の歩み」という言葉もあり、藤原氏の長者の家に慶事のあつた際に、勸学院の学生一同が整列して、慶賀に赴いたことをいう。一方の幼学書『蒙求』とは故事逸話集であり、唐の玄宗皇帝の頃に李瀚によりまとめられたとされる。標題は四言一句となり、韻文の体裁となっている。宋元時代は『蒙求』の影響が大きく、後続の類書を生み出した。故事成語を取り扱った必読書としてよく読まれた。

『日本三代実録』には、元慶二年（八七八）に貞保親王が九歳で『蒙求』を読んだという記述も見られる。『蒙求』を通して「螢雪の功」、

「孟母三遷」、「漱石枕流」といった故事成語が広まった。鎌倉時代には『蒙求』所収の故事に取材した源光行『蒙求和歌』も編まれ、戦国時代には清原宣賢『蒙求聴塵』、江戸時代には宇都宮遯庵『蒙求詳説』、毛利貞奇『故事俚諺絵鈔』、細合半斎『韓本蒙求』、服部南郭『新刻蒙求』、岡白駒『箋注蒙求』、服部南郭『旧注蒙求』、林述斎『古本蒙求』、田興甫『蒙求国字解』、桃華園『經典余師蒙求』など、多くの注釈書や関連書籍が世に問われた。

このような背景のもと、勸学院に住む雀が『蒙求』の一節「呂望非熊」を口ずさんだと思われる。太田晶二郎は『世俗諺文』に記載される「文屋辺雀」が「勸学院の雀」以前に使用されていたと推測し、長承三年（一一三四）古写本『蒙求』の振り仮名から当時は漢音によって音読していた状況を明らかにしている（「勸学院の雀はなぜ蒙求を轉つたか」『太田晶二郎著作集』第一冊）。また、塩出雅はこの「勸学院」とは藤原氏の大学別曹を指すのではなく、諸寺院に設置されて幼学教育をおこなった勸学講院

ではなかったかと推察している（「勸学院の雀——日本漢文学史の一斑——」『武庫川国文』四十三号）。このように「勸学院」は各地にあり、一般名詞的に用いられたことも踏まえたい。

三「勸学院の雀は蒙求を囀る」用例

故事成語「勸学院の雀は蒙求を囀る」は、平安末期の『宝物集』巻二には既に登場しており、「ゐなか山寺にただしばし侍りしに、（中略）勸学院のすずめは蒙求をさへづり」とある。鎌倉室町時代には『八幡愚童訓』巻下「勸学院ノ雀ハ囀^ハ蒙求^{マウ}」、神泉苑ノ鷺ハ勅使ニ被^レ取^リ、『曾我物語』巻七「女房達聞きて、「勸学院の雀とかや」と申しければ、『義経記』巻六「勸学院の雀は蒙求を囀るといしう申たるものかな」などが見られる。

謡曲や狂言にも多く散見され、「いやさやうには承り候へども、勸学院の雀は蒙求を囀るといへり」（頼政）、「けにやくはんかく院の雀はもうきうをさへづるとかや」（芳野）、「くはんがくゐんのすゞめはもうぎうをさへづり、智者のほとりのわらんべはならはぬ経をよむといふが、そなたのことじや」（箕潜）、「勸学院の雀は蒙求を囀り、智者の辺の童は習はぬ経を読むと、能うこそこれは伝へたれ」（富樫）などがあるほか、戦国時代の武将多胡辰敬^{たこけか}『多胡家訓』には「親子親類兄弟成トモ、マレニ寄合ホドハシタシキ心ナシ。火辺ハカハキ水辺ハウル

ヲフ、花ヲヲレバ袖カウバシ。勸学院ノスゞメナド申事モレナシ故ナリ」などが見られる。江戸時代に入ると、古辞書類にはもちろんのこと、以下の文学作品類にも多く取り入れられた。

① 徳永種久『上下紀行』（二六一七）

鶏鳥ハ八声を謡ひければ、雲雀は空に舞揚る。

勸学院の雀は、蒙求を囀^ハづるとは、能くこそ是は伝へたれ。

② 平為春『あだ物語』巻上（二六四〇）

使も此の鳥の事をば聞き及びて、姫君に語りけるは、「勸学院の雀は蒙求をさへづるとて、才智世にすぐれ給ひぬ。」

③ 作者未詳『東めぐり』（二六四三）

若しも不審の事あらば、問はせ賜へと言はれしは。幼けれども恥かしや。勸学院の雀こそ。鳴く音を聞けば蒙求の、智者の傍の童べは、習はぬ経を読めるとは、今こそ思ひしられつゝ、心ばかりの鉢を入れ、

④ 三浦浄心『慶長見聞集』巻一（二六四三頃）

然る処に門前の傍に草木のたぐひと見へて、からき物どもあつまりこぞり居て、いしゆ争ひをなす。愚老是を見て、誠に勸学院の雀は蒙求をさへづるとかや、草木経を説くといへるも是なるべし。

⑤ 大蔵虎明『わらんべ草』巻三（二六六〇）

勸学院のすゞめハ、蒙求をさへづる、智者のほとりのわらんべハならはぬ経をよむ。親の

ばち、あたるべき子を見るにこそ、にくさの余り、かハゆかりけり

⑥ 作者未詳『宇喜藏主古今咄揃』巻一（二六七八）

此女房、上方のものにて、ものごと尋常に、姿かたちもあてやかに、和歌の道もたしなミ、勸学院の雀とやらんにて、習はぬ文字も覚え、何にても文字にて返答したりける。

⑦ 寓言子『初音草 嘲大鑑』巻三（二六九八）

勸学院の雀ハ蒙求をさへづるといふハ古き世話なり。さすが九重の内ハ雲井ちかきゆへにや。

⑧ 西沢一風『女大名丹前能』巻四（二七〇二）

尤も左様には聞きぬれど、勸学院の雀は蒙求をさへづるよし、禿とあれば心にくし、先づ位ある女郎はいづくにか候。

⑨ 近松門左衛門『吉野都女楠』初段（二七一〇）

「合点く、知略はお家、勸学院の雀任せてをけ」と小をどりして、郎等二人が具足をぬがせ、長持に入棒さし通しになはせて、

⑩ 菊屋七郎兵衛『軽口出宝台』巻四（二七一九）

勸学院の雀ハ蒙求をさえつる。とかく口のよい商人ハ、銀もふけてしとをる。都より小万物をうりに丹波へ下る人あり。

⑪ 九二軒鱗長『和国小性形気』巻三（二七二〇）

されど是も風流勸学院の雀鰯、さあまたさゑたと吞出して、一番太鼓の比まで箸にもかゝらぬ阿方口、

⑫ 江島其磧『鬼一法眼虎の巻』巻五（二七三三）

名にしおふ兵法師の御家に年を重ねて御奉公致す私なれば、美事相應に計略はやります。勸学院の鼠は蒙求の入た文庫囃るといふ如く、習ふより馴にて、智略のほどを少と誉て下さりませ。

⑬ 庄司道恕『洞房語園後集』序文（二七三三）
勸学院の雀は蒙求を囀るといふ事、諷頼政の問答にて覚え侍る。されば其所に居て、其所の故事来由を知らぬはいと口惜き事にて、世話に云なるうつそりとは是成べし。

⑭ 八文字屋自笑『歌行脚懷硯』巻四（七六二）
にぎりこぶしにて胸をたゝき、「むかひの勸学院の雀さへ、忠々／＼とさへづりて、我をばげまするに、不忠／＼の身のはてや」と、涙をながし、

⑮ 参詩軒素従『夕涼新話集』巻二（二七七六）
其方ハむくつけなもので有たが、此内にいるだけで、風雅の情がうごいてきた。勸学院の雀じやな。

⑯ 横井也有『鶉衣』続篇卷一（二七二二）
我はそも俳諧はしらねど、釈迦の鼻をせゝりたる蠅が金色の光もさゝず。孔子の肌着を這たる蚤に道徳備はる物にもあらず。勸学院の雀が蒙求を囀れども、だみたる声を啼ぬ也けりと、鄙生立をほめたる鶯には及ぶべからず。

⑰ 山東京伝『古契三娼』（二七八七）
観世新道の童は、「有り難の影向や」とうたひ、狩野新道の蔵の壁に馬を画きしは、勸学

院の雀なるべし。かゝる名高き新道にもあらず、爰にきんご新道といへるは、金吾中納言の住給ひぬる古跡にもあらず。

⑱ 雀躍堂百成『ふくら雀』序（二七八九）

勸学院の雀は蒙求を囀り、大都会の童ハ習ハぬ晒落にさどく、眼から入て鼻へ抜ける事、鶴吉が小刀のごとく、するどき小耳大耳の、耳から入つて口へぬける、嘶の種をいわて止なんも、腹ふくるゝとやらと、ふくら雀と題して、恵方に向て囀り初る事しかり。

⑲ 望月三英『三英随筆』（一八〇五）

古き諺に勸学院の雀は蒙求をさへづり、智者の傍童は不_レ習経を讀と云伝たり。蒙求をもよませけるとかや、尤もなる仕立なり。

⑳ 式亭三馬『酩酊氣質』巻下（一八〇六）

勸学院の燕はならはぬ経を誦み、寺のほとりの童は弔ひの強飯を貰ふとやらで、私も其のお方のお蔭で、大きに悟りました。

㉑ 上田秋成『胆大小心録』巻上（一八〇八）

親の才覚を受次、手書文章は李王の風韻、常の業に読書講釈、大人小児の分なく、多く門に入て、おのづからに一人の子も、勸学院の雀よくさえづりたり。

㉒ 為永春水『春生鳥』巻八（一八三七）

実にも人情のおもむく所、おのづから下女までもかくのごとき洒落をいふ。勸学院の雀にあらねど、常住に馴れし口合ハ、さすがに土地にも依るものならんか。

㉓ 為永春水『英対暖語』巻三（一八三八）

さすがに大家の給仕へ御前勤めのありがたさは、勸学院の雀ならねど、風雅の道も聞きおぼゆるぞゆかしけれ。

㉔ 蓬萊文暁作画『雀の魁二編』（一八四四頃）

勸学院の雀ハ蒙求をさへつる。雲井にちかき九重ハ、すへ／＼の賤しき物うりまで、風月の情ありて、枕ことバをつけて売あるく。

㉕ 朝川鼎『善庵随筆』（一八四九）

及第のある歳は、国子生など。一同勉強し、誦読の声、日夜不_レ絶より。勸学院の雀は、蒙求を囀づる。たとへの意を以て、鶯なども歌を詠ずといはんために式年とは書きしにやあらん。

㉖ 空中楼花咲爺『俳諧発句一題嘶』（一八五一）

ひつかく筆も三本たらぬ猿智恵にて、横に這ふ蟹同前、口を糊する業にハあらねと、勸学院の雀にもおとり、蒙求も囀らず。余りべちやくちや多弁たら、にくまれて舌をちよつきりやられぬ用心、

㉗ 春廼屋幾久『三題嘶作者評判記』（一八六三）

栄寿丈の御幼少より、古人鯉丈、英賀、英泉、春水などの茶ばんを聞て、小耳の底に残つて居られるゆへ、いはゆる勸学院の雀でムりませう。

この他、雑俳集『誹風柳多留』には「蒙求ハ牛の鳴くのと知たふり 猿子」（六十八篇）、

「勸学は蒙求泉岳はちう／＼ 松鱈」（九十五

篇、「蒙求」はしらぬ勸学院の丁稚 巨眼（百一篇）などの句が詠まれ、当該成語が身近な言葉として人口に膾炙していた様子が垣間見える。

四 「勸学院の雀」とは何か―諸説を巡って―

この「勸学院の雀」とは一体何を指すのだろうか。江戸の儒者岡田新川は、『秉穂録』巻上で、宋の方岳「独立其一」を「勸学院の雀」の典故として紹介している。

村夫子扶兔園冊 村夫子兔園冊を挟み

教得黄鸝解讀書 黄鸝に教へ得て讀書を解く
能記蒙求中一句 能く蒙求中の一句を記し

百般嬌妮可憐渠 百般の嬌妮渠を憐れむべし

ここでは「雀」ではなく「黄鸝」に向けて村夫子が「蒙求」を読み聞かせている。横島昭武『書言字考節用集』巻九「雀囀蒙求」には字義

通り四条勸学院の林に住む雀が「蒙求」の題目を囀るという内容が記されている。ただ、これは必ずしも「雀」と解されたわけではない。戦

国時代の清原宣賢『蒙求聴塵』序には「世話二勸学院ノ雀ハ蒙求ヲサヘツルトイヘルハ李瀚カ

仕タル小女ヲ雀ト云。此者ニテモ蒙求ヲヲホ

エテヨミシ事ヲ云也」とあり、この雀は李瀚のもとに仕える小女の名前であるとしている。恵

空はこれを受けて「雀」説を明確に否定し、勸

学院に仕える小女の名前が「雀」だったとする

説を唱えた（『閑窓倭筆』巻上）。また、荻遊

「僕隸（下男）」（北村季吟『菟芸泥赴』巻二にも「下部」とあり、松井壺峰『野語述説』巻一には「僕隸」説に加えて「黄鳥（鶯）」説も見える。鶴飼信興『和漢雑笈或問』巻三には北宋の司馬光に仕える小女とある。さらに、『世話重宝記』巻三には勸学院の跡地が更雀寺になったことも言及されるが、この寺名は平安中期に奥州に左遷され、彼の地で客死した藤原実方の怨念が雀になったとする入内雀伝説を踏まえたものである。

また、当該成語は諸作品においてどのように取り扱われたのだろうか。寛文九年（一六六九）に刊行された『勸学院物語』という作品がある。美濃国の勸学院に住む雀の地頭殿は朱雀天皇の子孫としてこの地を治めている。ある日、地頭殿の子小雀が破風から落ち、これを見た鳥の九郎次郎と蛇の隼人尉は小雀を食べることを算段する。そこに雀の地頭殿が駆けつけて仏説をもつて彼らを説き伏せるといふ内容である。この中の挿絵に登場する禽獣は擬人化されている。また、江戸の文人大名松浦静山は『甲子夜話』巻五十六に湯島聖堂の大成殿上の鬼頭に鳩、鳥、雀、梟が止まった寓話を紹介する。役

人が諸鳥に新築の彫像に足を乗せたことを咎めると、鳩は「三枝の礼」、鳥は「反哺の孝」、雀は「勸学院の雀は蒙求を囀る」と述べ、それぞれの学問への深い関係を答えて役人を納得させる。これに対し、梟は何も答えられなかったた

め、役人から「不祥の禽」として罰せられたとある。上記から様々な作品の題材にされていることがわかる。

五 まとめとして

本稿では『和製』故事成語「勸学院の雀は蒙求を囀る」の用例を俯瞰した。「勸学院の雀」は漢文学習の必要性を述べる表現として汎用性が高く、平安時代から諸書に引かれてきた。

「蒙求」により多くの故事成語が伝わり、その影響力ははかりしれないものである。しかし故事成語は必ずしも中国由来のものをそのまま受容しているだけではない。中国古典の『戦国策』に由来する「狐藉（假）虎威」（『宋書』・

『文選』）を下敷きにして和製故事成語「虎の威を借る狐」が誕生したように、「勸学院の雀」もわが国で発達した故事成語の一例としてもつと注目されてもよいのではなからうか。「見よ

う見まね」の意味として、かつては古辞書類・文学作品類でも多く散見された語彙であるが、現代では「門前の小僧習わぬ経を読む」に比較

しても使われることは少なくなった。作家吉川英治は『随筆新平家』の中で「勸学院ノ雀、

蒙求ヲ囀ル」という諺がありました。今でいえば「大学の雀マルクスを囀る」といったような

ものです」（『新平家落穂集』）の形で応用しているが、故事成語の受容の観点から改めて考察してみたいところである。